“社会の公器”としての責任を果たす経営の実践に向けて

取締役（非常勤）

冨田 和之

表面改質技術による社会貢献を通じて、従業員のやりがいと誇りを高める取り組みを

社外取締役に就任して約４年になりますが、ESG経営を掲げてマテリアリティを明確にし、KPIによってその進捗を把握していることがトーカロの強みと感じています。なかでも事業が環境に与える影響に意識を向け、表面改質加工の技術をさらに高めて社会へ貢献していこうという姿勢を評価しています。一方、企業は社会の公器ですから、業績の向上だけでなく品質と生産性、ダイバーシティと人財育成、グローバル戦略などの施策を通してどう社会へ貢献するかという視点からの取り組みを強化してもらいたいと思います。

トーカロでは部品への表面加工現場の作業も細分化されているので、従業員が最終的な製品や設備に直接触れ合う機会が少ないという実情があります。しかし、その技術は確実に社会に寄与していますし、昨今の半導体の進化も、トーカロの技術があってこそです。残念ながら、その事実がまだ社内に広く浸透していないように感じています。新しい未来を創る礎（いしずえ）となってきたこと、そしてこれからさらに新しい分野に注力していくという会社の姿勢を対外的に発信することで、それが社内にも伝わり、従業員のやりがいにつながっていくのだと思います。

コーポレート・ガバナンスに関しては、コンプライアンス委員会、リスク管理委員会を定期的に開催するなど評価できる取り組みがなされています。企業倫理の理解浸透も引き続き重要です。私たち社外取締役も、ステークホルダーである株主、顧客、取引先などの皆さまと同じ視点で確認してまいります。

“社会から求められているもの”を意識して、トーカロにとっての「王道」の経営を

私が松下電器産業（現・パナソニック）に在籍していた際、創業者・松下幸之助氏が語った「王道・覇道・邪道」という経営観に触れた経験があります。「王道」とは社会から求められる企業の姿を踏まえ、経営基本方針に則った経営です。持続的な成長を実現するには、この「王道」に従うことが不可欠だと私は考えています。

トーカロにとって「王道」の経営とは、ビジョンである「人と自然の豊かな未来に貢献する」に沿ってマテリアリティに注力し、KPIの達成に向けて取り組みを推進していくことにほかなりません。持続的に成長を遂げている企業には、ぶれない明確な経営方針と、それを支える組織文化が根づいています。社会や環境が大きく変化するなかにあっても、目先の事象にとらわれることなく、将来の「あるべき姿」を見据えながら、事業を着実に継続していく姿勢が重要です。

開発部門を訪れた際、多くのものに関心を持ち、失敗を恐れず挑戦する意欲を感じました。失敗を容認する職場風土は次の技術革新を生み、未来を切り開く礎となると確信しています。トーカロには「挑戦し続ける風土」を今後も大切にしてもらいたいと考えています。

また工場長や従業員の方々と接していくなかで、トーカロにさらに成長してほしいという思いが強まりました。今後も執行側の経営陣とは異なる独立した立場から経営をモニタリングし、課題と感じた点は率直にお伝えします。持続的成長をともに目指す姿勢を共有していきたいと考えています。